

入門講座 ようこそ考古学

平成20年度 第6回テーマ 「時間のものさし」 - 自然科学を用いた年代決定 -

日時：3月6日(金) 19:00~20:30(受付は18:30から)
 場所：横浜市西公会堂1号会議室(横浜駅西口から徒歩10分 相鉄線「平沼橋駅」から徒歩8分)
 講師：戸羽康一(かながわ考古学財団)
 定員：108名(応募者が定員を超えた場合は先着順になります)
 費用：無料
 申し込み方法：往復はがき又はメールに行事名、氏名、住所、電話番号を明記して、かながわ考古学財団野庭出土品整理室へお申し込み下さい。(締め切り2月28日(金)必着)

発掘作業見学会・相模原市小保戸遺跡見学会(同時開催)

内容：遺跡の発掘調査作業・考古学体験、小保戸遺跡の調査成果の見学会
 日時：2月28日(土) 午前の部 11:00~12:30、午後の部 14:00~15:30
 ※小雨決行(荒天の場合は翌日の同時刻)
 場所：相模原市小保戸遺跡発掘現場
 JR橋本駅から神奈中バス橋本駅南口(5番乗り場)小沢行き「諏訪の森」バス停下車徒歩10分
 JR橋本駅から神奈中バス橋本駅北口(2番乗り場)鳥居原ふれあいの館行き「小倉」バス停下車徒歩20分
 自家用車可(お車でご来跡の際には諏訪の森バス停脇の道から入ってください。駐車スペースに限りがありますので、出来るだけ乗り合わせてお越しいただきますようお願いいたします。)
 費用：無料
 申し込み：不要
 問い合わせ：小保戸・大保戸遺跡発掘調査事務所 TEL:090-9013-6213(現場携帯)

「後北条時代の遺跡を掘る」発掘調査成果発表会

平成20年度 東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業
 内容：東京・神奈川・埼玉の後北条期の遺跡発掘調査成果・研究発表と出土品の展示
 日時：3月28日(土) 午後12:30~4:30
 場所：東京都埋蔵文化財センター会議室
 東京都多摩市落合1-14-2
 小田急線「多摩センター」駅徒歩5分、京王線「京王多摩センター」駅徒歩8分
 多摩都市モノレール「多摩センター」駅徒歩8分
 定員：120名(応募者多数の場合は抽選となります)
 費用：無料
 主催：東京都埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団・埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 申し込み：往復はがきに行事名、氏名、住所、電話番号を明記して、東京都埋蔵文化財センター広報企画係までお申し込み下さい。(締め切り3月12日(木)消印有効)
 問い合わせ：東京都埋蔵文化財センター広報企画係
 〒206-0033 東京都多摩市落合1-14-2
 TEL 042-373-5296

発掘帖バックナンバーはホームページ (<http://www.kaf.or.jp>) からダウンロードできます。

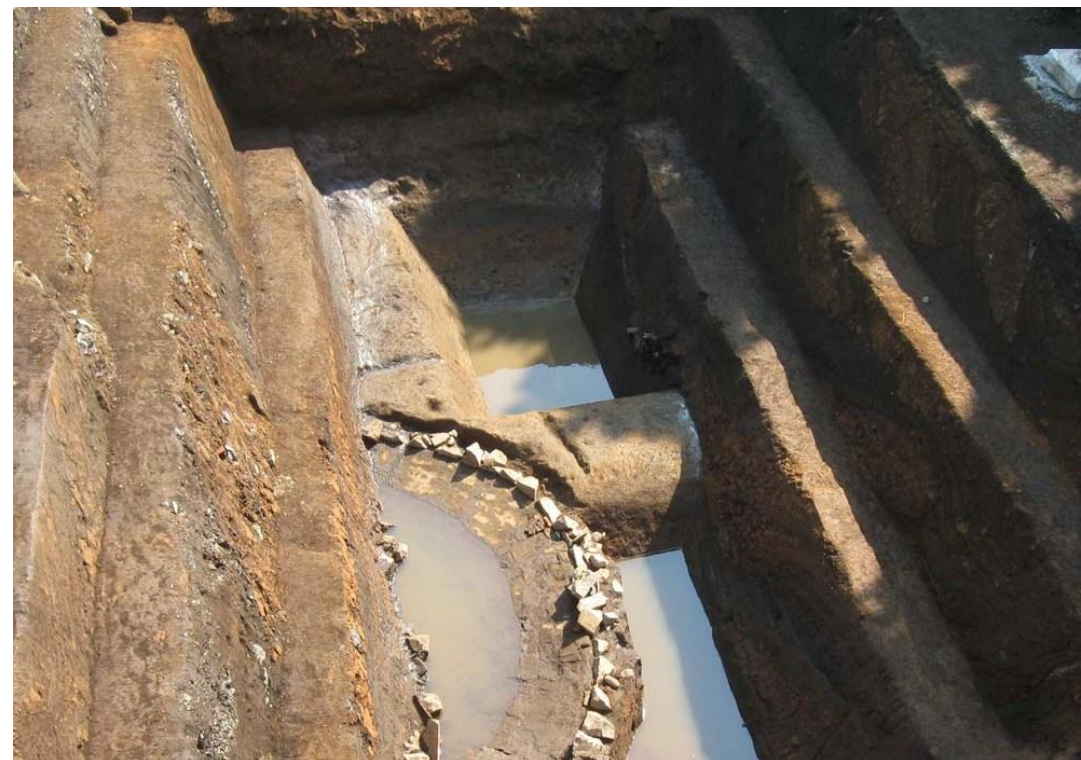
お申し込み
お問い合わせ

(財)かながわ考古学財団 野庭出土品整理室
 〒234-0056 横浜市港南区野庭町1660 E-mail: fukyu@kaf.or.jp
 TEL: 045-842-9888 (平日8:30~17:15) FAX: 045-842-9904

考古学財団発掘帖

2008
4号

かながわ考古学財団情報誌 通巻7号 平成20年12月26日発行 年4回発行



小田原市 小田原城跡八幡山遺構群 (おだわらじょうせきはちまんやまいこうぐん)

小田原城跡八幡山遺構群は小田原市城山しろやまに所在し、小田原城の中でも「八幡山古郭」と言われる八幡山丘陵の縁辺部に位置しています。調査は県立小田原高等学校の整備工事に伴う確認調査として2008年5月19日~10月15日まで実施しました。

今回の調査地は江戸期の伝承地名である「西曲輪」に相当し、調査の結果、絵図面により推定されていた西曲輪西堀、三味線堀、本曲輪北堀が実際に確認されました。中でも西曲輪西堀は、幅23m、深さ約7mを測ります。これは発掘された中世小田原城の堀の中でも最大級の規模を誇ります。また、堀底には障子しょうじ(堀底を仕切る障壁)を設けた障子堀しょうじほりであったことも分かりました。

(*写真中央下方に見える半円形の石組みは近代に造られた池であり、堀とは関係ありません。)

目次

- 発掘現場・出土品整理インフォメーション ● 行事案内
- 相模原市: 畑久保西遺跡 入門講座ようこそ考古学
- 寒川町: 宮山中里遺跡 発掘作業見学会・相模原市小保戸遺跡見学会
- イベントレポート ● 「後北条時代の遺跡を掘る」発掘調査成果発表会
- 考古学ミニコラム



(財)かながわ考古学財団

〒232-0033 横浜市南区中村町3-191-1
 ☎ 045-252-8689 FAX 045-261-8162 URL <http://www.kaf.or.jp>

発掘現場・出土品整理 インフォメーション

ぼくは川尻中村遺跡(相模原市)のはちまき土偶はっちです。発掘調査や出土品整理中の遺跡の紹介をします



畑久保西遺跡 (はたくほにしせいせき)

(所在地)	相模原市	(時代)	縄文時代、古墳～奈良・平安時代、中・近世	(調査期間)	2008年5月1日～7月15日
-------	------	------	----------------------	--------	-----------------

畑久保西遺跡は、相模原市城山町城山四丁目地先に所在する遺跡です。調査は一般国道468号首都圏中央連絡自動車道(さがみ縦貫道路)建設事業に先立ち、国土交通省関東地方整備局相武国道事務所の依頼を受けて2006年から2008年にかけて3度実施しました。

遺跡は相模川左岸の河岸段丘上に位置しています。これまで実施した調査によって、中・近世、古墳時代～奈良・平安時代、縄文時代の集落が展開する遺跡であることが分かってきました。なかでも縄文時代は本遺跡の中心的な時代と言えるでしょう。縄文時代の遺構は、^{たてあなじゅうきよあと}堅穴住居跡、^{はいせきいこう}配石遺構、屋外の調理施設と考えられている^{ろあな}炉穴や^{おとしあなじょうどこう}集石、獲物を捕獲するためのワナと考えられる^{いろり}陥穴状土坑などが発見されています。堅穴住居跡は楕円形をなす4本柱のもので、周囲を石で囲った^{いろり}炉を有していました。中期勝坂式期のものと思われます。配石遺構は人頭大をこえる^{おおがたれき}大形礫が集中的に配された遺構で、石組み状をなすものも存在します。



縄文時代後期出土遺物(2008年撮影)

宮山中里遺跡 (みややまなかざといせき)

(所在地)	寒川町	(時代)	弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世	(調査期間)	2004年4月～2007年5月
-------	-----	------	-------------------------	--------	-----------------

宮山中里遺跡は、寒川町宮山に所在する遺跡です。調査は一般国道468号首都圏中央連絡自動車道(さがみ縦貫道路)建設事業に先立ち、国土交通省関東地方整備局横浜国道事務所の依頼を受けて2004年から断続的に実施しています。

遺跡は相模川左岸の微高地に立地し、JR相模線沿いに広がっています。この遺跡は弥生時代から近世にかけての遺跡ですが、ここでは奈良・平安時代、古墳時代および弥生時代の遺構の概要を紹介します。奈良・平安時代の遺構は、^{たてあなじゅうきよあと}堅穴住居跡、^{ほったてはしらたてものあと}掘立柱建物跡、井戸、溝、土坑などが発見されていて、主に相模川からやや離れた内陸側に分布している傾向があります。古墳時代の遺構は、堅穴住居跡、土坑および古墳の跡が発見されていますが、堅穴住居跡と土坑は古墳時代前期、古墳は古墳時代後期の遺構で、古墳を造った人たちの集落はこの遺跡では見つかっていません。弥生時代の遺構は、遺跡範囲の南端と北端で発見されていて、北側の集落跡では堅穴住居跡が、南側の集落跡では堅穴住居跡、^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓、^{どきかんぼ}土器棺墓、^{かんこう}環濠が発見されています。このように時代ごとに土地利用の仕方が異なっていることが特徴です。



8号墳(古墳時代の墓跡)(2006年撮影)

イベントレポート

神奈川県内では、道路や住宅等の建設工事に伴って、各地で遺跡の発掘調査が行われています。遺跡の現地説明会はときおり開催されますが、発掘調査終了後に行う室内での出土品等整理作業が一般の人々の目に触れる機会はほとんどありません。

このため、平成20年11月29日に野庭出土品整理室で「覗いてみよう！発掘調査が終わったら一報告書への道のり」と題して、出土品整理作業・報告書作成作業の見学会を実施しました。見学会では、遺物の水洗い・実測・写真撮影などの各工程を見学していただきました。また、整理作業体験として遺物の水洗い・土器の拓本なども体験していただきました。参加してくださった皆さん、ありがとうございました。来年度も実施する予定ですので、また参加してくださいね。



見学風景



拓本体験

※「覗いてみよう！発掘調査が終わったら一報告書への道のり」は、神奈川県より委託を受けた普及事業です。

考古学ミニコラム 第6回 大工道具の象徴 墨壺

考古学のホットな話題や資料の見方を取り上げたり、講座等で多く寄せられた質問に答えます。

現在でも、大工さんが使用する^{すみつぼ}墨壺。これは古くから使われてきた道具です。木材を^く削りぬき、後方に^く墨池と糸巻きをつけて、糸を木材の両端で固定し、指ではじくと木材に真っ直ぐな線が引けます。これを切り出して建物に使用します。『春日権現記』など鎌倉時代の^{えまきもの}絵巻物には、寺社造営の場面に使用している様子が度々描かれ、欠かせない道具でした。奈良県の^{へいじょうきゆう}平城宮遺跡、兵庫県の^{さかね}栄根遺跡などで出土し、少なくとも8世紀代から存在が確認できます。中世では、鎌倉時代と考えられる墨壺が鎌倉市の^{ほうじょうときふさ}「北条時房・^{あきときいていと}顕時邸跡」という遺跡から出土しています。この遺跡は^{つるおかはちまんぐう}鶴岡八幡宮の参道として著名な^{わかみやおおじ}若宮大路に面し、鎌倉時代は幕府の要職につく有力人物の屋敷地と想定され、その出土は意味を考えさせられます。思い起こされるのが、^{とうだいじん}東大寺南大門の梁の上で、中世期に修復工事に携わった大工の墨壺と考えられるものが残されており、忘れ物もしくは自分の仕事の象徴として故意に置いていったという想像まで沸き立ちました。鎌倉の墨壺も糸巻き部分が竹製であるなど、個性がうかがえます。墨壺は大工にとって木材への印をつけるというだけでなく、自らの存在を象徴する印のようなものでもあったのでしょうか。



東大寺南大門の墨壺

(出典 竹中大工道具館 1989『竹中大工道具館展示解説』より)